

13歳の女の子へのプレゼント

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2018-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024549

13歳の女の子へのプレゼント

鈴木実佳

1. はじめに

18世紀イギリスの文化研究で大きな関心を集めてきたのは、「小説の勃興」と印刷文化の確立と繁栄である。18世紀に顕著になった新しい動向であり、また文学の中での小説と社会における出版物が、その後、現在に至るまで占めてきた重要性を考えると当然のことだろう。その動きなかで、作家たちは、「著者」になるということは何を意味するかを考え、意識的に著作のなかでそれを論じた。著作を書物市場に出したとき、公共の場における消費物品となったモノと著者の間、そして購入者である読者の関係はどうなるのか、市場という人の顔のみえないマスがかたちづくる、とらえどころのないものを相手にする世界に、自分が創り出したものを投入することは何を意味するのかといったことを人々は考えた。著者が出版物に対する制御を利かせるために何ができるのかを検討し、それを試す作家、あるいは読者の解釈の自由の余地をつくって幅をもたせ、楽しませる作家がでたのも、作者と市場と読者の間に新たな展開が生じる過程でのことだった。一方で、著者が誰であるのかを記すことが重要性をもたない手書き・手描きの書き物や冊子の文化も継続した。女性たちの中で贈られた結婚のお祝いの品のなかの一部であったレシピ本の伝統はその一端である。ペンをとった人物とそれを所有する人物の関係が濃く、無名性・匿名性をもった市場を経由しない書物の場合、おそらく贈られた人物にとって、冊子は直接的に贈った人物を明確に表象し、だからこそ、あるいは、にもかかわらず、どんなに書かれたものが贈られた人の人生に深く大きな影響を及ぼしたとしても、贈っ

I am grateful for the support provided by Anthony Hughes-Onslow, Darren Bevin, Corrine Saint, Helen Thirlway and all the other staff at Chawton House Library and for their kind permission to use their manuscript and printed books collection for my research and publication.

た人物は「著者」として現れない場合が多々ある¹。

新しい文化を生み出した小説の時代でありながら、実は出版物の多くが小説ではなく、人生指南書やコンダクト・ブック、そして宗教関連の書籍であったことを思い出しておこう²。本稿で注目するのは、小説でもなく、出版されたものでもない冊子である。敬虔なキリスト教徒を育てるための手書きの小さな本を主人公にして話を進めていきたい。

2. ラッシュアウト

ここで扱うのは、チョートン・ハウス図書館（Chawton House Library, Hampshire, UK）が所蔵する手稿本のなかの一冊である。これは当該図書館のカタログでは次のように記されている。

AUTHOR	TITLE	NO.	CLASS	NOTES (taken selectively from Heritage catalogue)
Rushout, Elizabeth	Devotions prayers and meditations for the daily use of well disposed Christians	7922	RUS	Manuscript in ink, dated 13 December, 1743.

読み始める前に、著者がどのような人物であるか気になるところであるが、どうも妙だった。ここに名前が挙がっているラッシュアウトは、著者ではないのである。それなら、何故‘Author’として挙がっているのか。それは、彼女が（カタログはそれを明言してはいないのだが）この著作に最も近いところにおいて、名前が特定できる人物であるからだ。著者であるかのように名前がでているラッシュアウトは、この冊子が贈られた1743年当時、13歳の少女だった。

¹ Thomas Keymer and Peter Sabor, *Pamela in the Marketplace : Literary Controversy and Print Culture in Eighteenth-Century Britain and Ireland* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005); Paul Poplawski, ed. *English Literature in Context* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), 245-6; Dustin Griffin, “The Social World of Authorship 1660-1714,” in *The Cambridge History of English Literature, 1660-1780*, ed. John J. Richetti (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), 42-44, 55-60; Bob Harris, “Print Culture,” in *A Companion to Eighteenth-Century Britain*, ed. H. T. Dickinson (Oxford: Blackwell, 2002), 283-93.

² Jan Fergus, “Provincial Servants’ Reading in the Eighteenth Century,” in *The Practice and Representation of Reading in England*, ed. James Raven, Helen Small, and Naomi Tadmor (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), 202-25; Jeremy Gregory, “The Church of England,” in *A Companion to Eighteenth-Century Britain*, ed. H. T. Dickinson (Oxford: Blackwell, 2002), 227.

まず、この名前のわかっている女性について述べておこう。エリザベス・ラッシュアウト (Elizabeth Rushout, c1730-1772) は、政治家で准男爵の父 (Sir John Rushout, 4th Baronet, 1685-1775) と伯爵家に生まれた母 (Lady Anne Compton) の間に生まれた。父は、マルムズベリー選出の国会議員を務めた経歴をもち、非常に高い収入を得ることができる海軍出納官の職に就いたこともあった。その父は果たせなかったが、エリザベスの弟 (John Rushout, 1738-1800) は父親が念願した貴族となった (1st Baron)。

1761年、エリザベスは結婚した。相手は、北ウエールズに壮麗な城をもち、国会議員を務めていたリチャード・ミドルトン (Richard Myddelton, 1726-1795) であった。城は長い歴史をもつチャーク城 (Chirk Castle, 1295-) であり、これは、イングランドとウエールズの境に位置する要塞である。現在はナショナル・トラストの管理下にある。夫妻は、文芸に造詣深く、彼らが生きた18世紀の時代の趣味と流行に合わせて古い城を改築・増築すべく、ウエールズやチェスターなどで活躍していた建築家ジョゼフ・ターナー (Joseph Turner, c1729-1807) を起用して、城にかなりの改変を加えた。この大規模プロジェクトは彼らの結婚後、立て続けに行われた (Green House, 1767; stables, 1768-1769; the state dining room, 1770-1771) が、エリザベスが亡くなった1772年以降は一時改築を休止している。彼女は、一男二女 (Richard, 1764-1796; Charlotte, 1770-1843; Maria, 1772-1843) を産み、二女を産んだ年に亡くなった。

3. 13歳

13歳となる時、エリザベス・ラッシュアウトは特別な贈り物を受けとった。19世紀以降の公教育の仕組みのなかでは、多くの国で13歳は区切りの年となっているわけではない。現在のイギリスの場合、区切りになっているのは、義務教育修了のGCSEの試験を受ける (15歳あるいは16歳、選挙権をもつことになる「成年」18歳といった年齢となろう³。誕生日が盛大に祝われることのある21歳が挙げられることもある。これは過去の法令などの名残で、1969年までは

³ 子ども時代の終了とみなされる学齢期終了の年齢について、イングランドとウエールズでは、義務教育が導入された1880年には10歳、1918年には14歳、1944年で15歳、1972年に16歳となっていた (Hugh Cunningham, *Children and Childhood in Western Society since 1500*, 2nd ed. ed. (Harlow: Pearson Longman, 2005), pp. 181-82.

現在の婚姻適齢は、イングランドとウエールズでは18歳 (親の同意があれば16歳)、スコットランドでは16歳である。

「成年」は21歳とされ、両親などの同意がなくとも結婚を成立させることができる年齢が21歳であった。それでは13歳という年齢は何を意味するのか。

人間と魔女が結婚をして、生まれた子どもが女の子のばあいは、たいてい魔女として生きていくのがふつうでした。でもたまにはいやがる子もいるので、十歳をすぎたころ、自分で決めてよいことになっていました。もし魔女になると決心がつけば、ただちにおかあさんから魔法をおしえてもらって、十三歳の年の満月の夜をえらんで、ひとり立ちをすることになります⁴。

これは、日本で書かれたフィクション『魔女の宅急便』の一節であるが、キリスト教徒の堅信式（7歳から。13歳から14歳で行われることが多い）に準えた設定である。堅信式は、信仰を自らの意思で志向するかたちをとって、責任ある完全なキリスト教信者となるための儀式である。13歳で一人の人間として、大人としての扱いは始まり、ひとりだちするという慣例は、元服の文化をもっていたはずの日本の私たちにとっても、驚きをもって受け止められるものであるが、18世紀のイギリス人にとっては次のような意味をもっていた。13歳は‘teens’の最初の年であり、人の人生の段階のなかで、「子ども」から、大人の始まりである「青年」に移行する年齢である。12（ダース）をひとつの単位として使う文化においては、12年で一回り目を終え、次の段階に進むということであった。また、ユダヤ教で大人としての責任をもつ年齢が男子13歳、女子12歳というのが知られていた。社会的慣例としては、勤労する多くの人にとって子ども時代が終わるのは、使用人として雇われる、あるいは徒弟として修行・訓練に入る時期であり、これは、親元を離れて、勤務先の主人や親方のもとで暮らすようになる時であって、12歳から14歳くらいがこの時期にあたった⁵。フィクションの中の登場人物でいえば、ジュリエットは13歳から14歳になろうという頃に恋におち（『ロミオとジュリエット』c1595）、パミラは15歳で使用人として住み込みを始めて雇い主の目にとまった（『パミラ』1740）。『ピーターパン』（1904）のウエンディは「子ども」としての最後の年、12歳の設定である。

⁴ 角野栄子『魔女の宅急便』（東京：福音館書店、1999[1985]），p. 8.

⁵ Cunningham, *Children and Childhood in Western Society since 1500*, p. 97.

4. 勤行、祈祷、瞑想

冊子は金色の飾りを施した美しい表紙をもち、見返しはマーブルペーパーで、前書き2ページ分のあと、第1頁が始まり、最終は第77頁である。その多くのページが、時に応じた祈りの言葉で満たされている。「起床の祈り」、「朝の祈り」、「夕の祈り」、「就寝の祈り」、「誕生日の祈り」などは、それぞれ数頁に及び、他に「恵みを受けたときに」、「善行をしたときに」、「施しものをしたときに」などの機会に唱える言葉がそれぞれ数行書かれている。各ページには、ページ番号がふられ、几帳面に余白がとってあり、丁寧なわかりやすい文字で書かれている。文章は、他の18世紀半ばのもの比べると多少古風な印象を与えるだろう。二人称について、贈り主からの呼びかけには、‘you’, ‘thy’ が使われ、祈祷のなかの神への呼びかけは、‘thou’, ‘thy’, ‘thee’ となっている。定冠詞は、時折り ‘ye’ となり、また ‘it’ あるいは ‘that’ にあたる ‘yt’ が使われていることがある。

内容は祈りの言葉の例示であるので、贈られた13歳は指導の対象であるが、少なくとも冒頭では、本人の主体性・責任が強調される。冊子の目的を表明している部分をみてみよう：「これまでは機械的の反復によって祈りを唱えてきたでしょうが、もうあなた (Dear Child) は、自分自身で厳かな誓いの責任をとる年齢に達したことを考えるべきです。かつては洗礼において、誰かがあなたのために荘厳な誓いをたててくれたと思います」というように、大人のお膳立てと指図から独立し、自主的な選択としての信仰を勧める⁶。それでもまず強調されるのは、「永遠の幸福のために」「早くからの敬虔さ」が必要であるということ、そして、「若さゆえの欲望」や罪を避けるべきことである⁷。17世紀によくあったような、子どもを理性的人間としての資質をまだ備えない、生まれつき罪深い存在として受けとる姿勢をとってはいない⁸。しかし、青年となり、大人の門口にたっている13歳は、若さゆえの煩惱をもつと考え、それに囚われないように備える認識を促す⁹。また、冊子を受けとる相手が社会的経済的に恵まれた環境にある人物であることを踏まえ、勤労から解放された余暇をもつのであ

⁶ *Devotions prayers and meditations for the daily use of well disposed Christians*, n.p.

⁷ *Devotions*, p. 2.

⁸ *Books on Children in 16th-18th Century Britain, Series III 1571-1699*, Eureka Press, 2010; Cunningham, *Children and Childhood in Western Society since 1500*, 4-16, 25-6, 45-69.

⁹ たとえば、シェイクスピア『お気に召すまま』2幕7場で示される人生の7段階において、学齢期のあとの第3段階は恋をする時期となっている。

るから、その時間を祈りにむけるべきであると述べる¹⁰。

祈りは、ほぼ目覚めた瞬間から始まる。朝、目覚めたら、即座にすべてのことを頭から消し去って、唱えるべき目覚めの祈りがある。これは、眠りから覚めて目をあけることができた喜び、光を見ることができたことの恵の認識と感謝を表したものである¹¹。それに続く朝の祈りでも、まず「神よ、あなたから受けるすべての恵みのために誉れあれ。この過ぎ去った夜、私をお守りくださったことのために栄光神にあれ。夜にご覧になった過ちを赦し、今日これから若さゆえの欲望を避けることができますよう、そして若い私が日々創造主を思うことができるよう、恩寵をお与えください」と続く¹²。

この祈り書のなかで、何度も繰り返されるのが、暗闇への恐怖である。眠りと暗闇、そして死は直結している¹³。目を開かせ、光に満ちた世界に自分を連れ戻し、闇と「死の影」から日々救ってくれるのは神である。光のある世界を見ることができるのは、日々繰り返される神の恩寵のおかげである。たとえば、次のように、光と闇が度々言及される。「今夜私の魂をお召しにならなかったお恵みを可能な限りの慎みをもって感謝いたします」¹⁴。「光がありますように。私の目をあけさせてください。私の眠りが死ではありませんように。」¹⁵「あなたを恐れる人が安らかに休息できますように、夜の恐怖から私を解放してくださいように。」¹⁶「あなたからの新たな恵みなしには、太陽は昇らず、私に照ってくれることもありません。」¹⁷「またあなたにお仕えすることができるよう、明朝も起き上がることができますように。」¹⁸人工的な光をいつでも使うことができる環境にある私たちの想像が及ばないところで、啓蒙の時代を生きたこの人たちは、次の日の陽の光を目にする希望、及びそれと裏返しの闇にたいする恐怖に大きく影響されている。

¹⁰ *Devotions*, pp. 48-9.

¹¹ *Devotions*, pp. 13-4.

¹² *Devotions*, p. 16.

¹³ *Devotions*, p. 22.

¹⁴ *Devotions*, p. 21.

¹⁵ *Devotions*, p. 40.

¹⁶ *Devotions*, p. 41.

¹⁷ *Devotions*, p. 44.

¹⁸ *Devotions*, p. 46.

5. 著者

さて、それでこの冊子の著者はだれであるのか。女の子が大人になっていこうというときに、手書きの書物を贈る人は、おそらく、その女の子の成長と人生の幸福を願う、親、名付け親、祖父母、親戚など、一家の中、あるいは一家と深い関係にある誰かで、上の世代の人物であろう。エリザベス・ラッシュアウトの母 (Lady Anne, おそらく1747年没) は1743年に生きていたと考えられるので、候補者の一人である。その上の世代では、母方の祖母 (Jane Compton, née Fox, 1666-1721) は既に亡くなっていた。父方の祖母はそれより更に早く生涯を閉じていた (Alice Rushout, née Pitt, 1698年没)。ところが、母方の祖父 (George Compton, 4th Earl of Northampton, 1664-1727) は、父の姉 (Elizabeth Compton, Countess of Northampton, née Rushout, 1682/83-1749/50) と再婚していたので、新たな「祖母」が生じていた。

祖父の再婚相手エリザベスの立場にたってみよう。彼女は1726年に結婚した。翌年には夫が亡くなった。残されたエリザベス・コンプトン (ノーサンプトン伯爵夫人) にとって、1730年頃に生まれたエリザベスは、夫の孫であり、かつ、弟の娘である。彼女の結婚前の名前は、エリザベス・ラッシュアウトであるので、結局は「著者エリザベス・ラッシュアウト」が正しかったということになり得るが、書かれた当時は、彼女は故ノーサンプトン伯爵の妻の立場であったので、その人を「エリザベス・ラッシュアウト」と旧姓で呼ぶのは無理がある。

贈られたエリザベスからみて、この人物は、母方と父方の両方からつながっている。ノーサンプトン伯爵夫人 (Dowager Countess of Northampton) は、亡くなった祖父の妻であり、かつ叔母である。少女との関係の深さから、この人物を重要な候補者であると考えて良いであろう。伯爵夫人は、遺言書で小さなエリザベス・ラッシュアウトが21歳に達した時、あるいは婚姻時のいずれか早い時点で、彼女に2,000ポンドを与えることを明記した¹⁹。40歳を過ぎて結婚し、自分の子どもをもたなかった伯爵夫人が、孫であり姪であるエリザベス・ラッシュアウトに書物を贈り、遺言でもその子を優遇していると考えることが可能である。

¹⁹ PROB 11/777/58。サミュエル・ジョンソンが亡くなった1784年の時点での財産は、約2,300ポンドだった。18世紀半ばの1ポンドは、現在の100倍以上に換算される (Louise Goulding and Grahame Allen Jim O'Donoghue, "Consumer Price Inflation since 1750," *Economic Trends* 604(2004), 38.)。

祖母は、著作のなかで、最も大切な人のなかに挙げられることも、挙げられないこともある。著者が少女に与えている祈りの文言での祖母の扱いが一貫していないのである。ある箇所の祈りなかで、「友達や親戚」に触れる前に、とりわけて特定して言及している人物は、「父、母、祖母、弟、妹」である：「神さま、私の父、母、祖母、弟、妹、そして特にお世話になっている人々に祝福を与え、彼らをお守りください。」（‘Bless & defend O Lord my Father, my Mother, my Gran Mother my Bro^r Sister and all to whom I am anyway particularly obliged ….’）²⁰祖母は単数で挙げられている。1743年の時点で存命の「祖母」は父方の祖父の再婚相手であるノーサンプトン伯爵夫人のみである。因みに、エリザベス・ラッシュアウトには弟と妹がそれぞれ一人いるので、弟、妹も単数で示され、現実と適合している。祖母は、ノーサンプトン伯爵夫人を指し、彼女は同時に「叔母」でもあるがそうとは呼ばれず、また他に両親の兄弟姉妹は存命であっても、叔父叔母としてここには挙げられなかった。祖母としての立場はかなり特別な扱いを受けているということになる。別の箇所の祈りでは、「私の父、母、弟、妹などと、特にお世話になっている人たちを祝福し、お守りください」（‘… bless & defend O Ld my Father my Mother my Br Sister &c & all to whom I am any way particularly obliged’）となって、「祖母」が抜けている²¹。ひとつの箇所では、直近の家族として挙げられ、別の箇所では挙げられていないことの意味を推測するとしたら、最も大事な家族に準ずる立場であることが挙げられる。もしも彼女が著者であるとしたら、自分をその中にいれるかどうかについて迷いや遠慮を見ることができであろうが、これは今のところ確定できない。

確かなのは、1743年に、丁寧に記された唯一無二の手書きの本が若い世代に贈られ、そしてそれが保管されて、現在に伝わっているということである。

参考文献

Manuscripts

[Rushout, Elizabeth.] *Devotions prayers and meditations for the daily use of well disposed Christians*. 1743. Chawton House Library, Hampshire, UK.

²⁰ *Devotions*, p. 31.

²¹ *Devotions*, p. 45.

Will of Countess of Northampton. PROB 11/777/58. The National Archives.

Secondary Sources

Cunningham, Hugh. *Children and Childhood in Western Society since 1500*. 2nd ed. ed. Harlow: Pearson Longman, 2005.

Fergus, Jan. "Provincial Servants' Reading in the Eighteenth Century." Chap. 11 In *The Practice and Representation of Reading in England*, edited by James Raven, Helen Small and Naomi Tadmor. 202-25. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.

Gregory, Jeremy. "The Church of England." In *A Companion to Eighteenth-Century Britain*, edited by H. T. Dickinson. Oxford: Blackwell, 2002.

Griffin, Dustin. "The Social World of Authorship 1660-1714." Chap. 2 In *The Cambridge History of English Literature, 1660-1780*, edited by John J. Richetti. 37-60. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.

Harris, Bob. "Print Culture." In *A Companion to Eighteenth-Century Britain*, edited by H. T. Dickinson. 283-93. Oxford: Blackwell, 2002.

Jim O'Donoghue, Louise Goulding and Grahame Allen. "Consumer Price Inflation since 1750." *Economic Trends* 604 (2004): 38-46.

Keymer, Thomas, and Peter Sabor. *Pamela in the Marketplace : Literary Controversy and Print Culture in Eighteenth-Century Britain and Ireland*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.

Poplawski, Paul, ed. *English Literature in Context*. Cambridge: Cambridge University Press, 2008.

